

シンポジウム記録

# 佛教大学法然仏教学研究センター開設記念シンポジウム 「源を尋ねる意義—いま、なぜ法然仏教学なのか—」

日時：平成26年7月19日(土曜) 13:30~16:00

会場：佛教大学紫野キャンパス常照ホール（成徳常照館5階）

■プログラム：

第Ⅰ部 「法然仏教学研究センター開設の意義」

開設の経緯 山極 伸之（法然仏教学研究センター長・学長）

研究の内容 本庄 良文（法然仏教学研究センター研究員・仏教学部教授）

司 会 伊藤 真宏（法然仏教学研究センター研究員・仏教学部准教授）

第Ⅱ部 トークセッション「法然仏教学研究センターへの期待」

ゲスト：内田 樹（神戸女学院大学名誉教授）

ゲスト：釈 徹宗（相愛大学教授）

山極 伸之（前掲）

本庄 良文（前掲）

コーディネーター：曾和 義宏（法然仏教学研究センター研究員・仏教学部准教授）

司 会：伊藤 真宏（前掲）

## 第Ⅰ部「法然仏教学研究センター開設の意義」

**伊藤** 失礼いたします。ただいまより佛教大学法然仏教学研究センター開設記念シンポジウムを始めさせていただきます。本日は、土曜日のお出ましにくいところ、ご来場いただき誠にありがとうございます。本日、司会を務めますセンター研究員、仏教学部の伊藤真宏でございます。どうぞよろしくお願いいたします。法然仏教学研究センターはさまざまな方のご尽力、ご協力によりまして、本年4月1日に開設され、稼働いたしております。本日は開設記念として、内田樹先生、釈徹宗先生をお招きし、宗門大学において宗祖の名前を冠した研究所を設けることの意義や方向性、期待などを議論していただきます。4時頃までの長丁場でございますが、どうぞごゆっくりお過ごしいただき、議論の行方を見守りいただきつつ、それらの意義を共有させていただければというふうに考えております。どう

ぜひよろしくお願いをいたします。さっそくですが、まず法然仏教学研究センターのセンター長、本学学長、山極伸之が、センター設立の経緯や主旨についてご説明を申し上げます。では、山極先生よろしくお願いいたします。

**会場** (拍手)

**山極** ただいまご紹介をいただきました、佛教大学の山極でございます。学長という立場もありますが、この4月より、先ほど司会よりご紹介のありました、法然仏教学研究センターのセンター長も務めさせていただくということで、本日、まず最初に、この法然仏教学研究センター開設に至りました経緯を、簡単に私のほうからお話しをさせていただき、そのあと具体的なセンターの研究の中身、内容等について、本庄研究員のほうから説明をさせていただくというかたちで、まず第1部を進めさせていただきたいと思います。お手元に大まかなお話しさせていただく内容、資料といたしまして、開設の経緯もまとめさせていただいております。重なる部分もあろうかと思いますが、合わせてご覧いただければと思います。

先ほどもご紹介いただきましたように、この4月から本センターの開設にこぎ着けることができました。そこで、本センターが目指すところ、そして将来に向けて行わなければならない点、それらに関しましては、本日のこのシンポジウム全体を通じて、皆様にもご確認をいただけるのではないかと思います。この研究センターの立ち上げの経緯について説明させていただきたいと思います。それは、直近のところで申しますと、実は2012年、一昨年になりますが、佛教大学が開学100周年という大きな節目を迎えた際に、私たちがまとめ上げた10年後の佛教大学像、10年後に大学がどのような姿を目指すのかということで公表をさせていただきました「佛大 Vision 2022」の内容が、直接的な関係をもっております。佛教大学は前身となります佛教専門学校、さらにはそれ以前の学校あるいは学問所、こういった前史を踏まえまして、1912年、専門学校として、学校としての歩みをスタートさせ、そして佛教専門学校となり、戦後、佛教大学となって2012年に開学100周年という節目を迎えることができました。この間、さまざまな皆様方に、とりわけ本学設立の母体であります浄土一宗の先学の皆様方のご理解、ご支援、そしてご協力のもとで大学は100年の歩みを続けてくることができたと、改めて感謝をしているところでございます。その大学が100年を踏まえて、さらに次なる100年に向かってどのように進んでいくのか、現代社会は激動する状況下にありますので、そのような中で100年後を描くことはなかなか困難でございます。そこで私たちは、まず10年後の大学像というものを、ヴィジョンのかたちでまとめるという作業を行いました。そのヴィジョンの中に八つの到達目標を掲げておりますが、本日、それらすべてを細かく説明することは省略させていただきます。本学のHPをご覧いただければ、そちらにも「佛大 Vision 2022」をすべて掲示しておりますので、関心がおありの方々にはそちらをご覧いただきたいと思います。その八つの

到達目標の中、4番目の項目として、「建学の理念に基づき、法然上人の教えを体現するための大学としての使命と、100年にわたる歴史を踏まえた特色ある研究を推進する大学」を目標の一つとして掲げさせていただきました。先ほども申しましたとおり、100年間にわたって大学が蓄積してまいりました研究の土台というのは、当然、既に確固として存在するわけではありますが、それをさらに発展させ、また今という時代、そしてこれからやってまいります来たるべき未来に向けてどのように展開していくのかということで、ヴィジョンの中に法然上人の教えを体現する大学としての使命、これをしっかりと果たさなければならぬということで、目標を掲げさせていただきました。さらに八つある目標のもとで、具体的な取り組みの基本方針、こちらも別途、ヴィジョンの中で提示をさせていただきましたが、そこでは六つの枠組みを設定しております。これは大学の持つております機能とも関係しますが、教育の面であるとか、あるいは学生の支援の面であるとか、そして研究、社会連携、社会貢献、生涯学習など、具体的に基本となる方針を定め、そのもとで大学の取り組みを行っていくという枠組みで提示させていただきました。その六つの枠組みの3番目のところに、研究にかかわる取り組みの基本方針を記させていただきましたが、先ほどの到達目標と合わせまして、大学の使命に即した特定の研究、これを推進するために法然仏教学研究センターを設置するということを明示させていただき、その計画に基づいて準備を進め、現在、本日のこのシンポジウムに至っているとご理解いただければと思います。ただ、ヴィジョンとして掲げ、すぐにセンターを立ち上げるということができたというわけではございません。前身といたしまして、2013年度に、佛教大学総合研究所の中の常設研究、特定の期限を設けずに恒常的に研究を継続していくというような、そういう研究体制として、まず「法然仏教の多角的研究」という研究グループを設け、そこでの研究がスタートいたしました。

そもそも佛教大学総合研究所、こちらは1991年に開設された機関であります。長い歴史の中で大学がさまざまに設置をしてまいりました研究所、これは例えば仏教文化研究所でありますとか、仏教社会事業研究所でありますとか、あるいは歴史研究所、心理学研究所、社会学研究所など、大学が学問領域、あるいは教育の領域で、さまざまに組織を拡大していく中で研究所も多数設置されていましたが、それらを統合するかたちで、1991年に佛教大学総合研究所が開設されました。その中で、これまでに、既に仏教にかかわります研究も継続的に推進してきておるわけではありますが、改めてその中に常設研究として「法然仏教の多角的研究」という組織を設け、さらにそれを独立させて研究班の研究を継承することで、この4月、当初の予定よりも早くなりましたが、法然仏教学研究センターの開設に至ったという時間的な経緯がございます。

本研究センターは仏教精神を建学の理念とする佛教大学、そして法然上人の教えを大学設置の根幹としている佛教大学、この佛教大学にとって、大変重要な意味を持つセンター

であるというふうに考えます。大学の使命には、教育、研究、社会貢献という三つが通常取り組むべき内容として掲げられますが、建学の理念というものをしっかりと体現した有為な人材を社会に輩出していくためには、大学の特色を踏まえた教育がもちろん不可欠であります。本学の場合は校名に冠する仏教の思想、とりわけ法然上人の思想に立脚した教育、これが大学の教育の根底に位置づけられ、そのもとで優れた人材の輩出を目指すことが使命であると位置づけられます。今日のような混沌とした社会状況の中で、社会の要請に応えることができる、そういった優れた教育を展開していくためには、その基盤となります研究の充実というものが必要であり、これを今日的な社会情勢を踏まえて推進していくためにも、私たちは世界で初めてとなります法然仏教学研究センターの開設、これを計画し、このセンターの開設は本学でしか成し得ない、佛教大学こそが成し得る、そういった取り組みであると位置づけ、開設に至ったわけでございます。そして、その研究センターの活動を通じて、法然仏教学の中身を、これから世界に向けて発信していかなければならないと考えているところでございます。

本研究センターでは、のちほど具体的な、もう少し細部にわたります研究内容について、本庄先生からご紹介をいただきますけれども、浄土学を中心といたしまして、仏教学、あるいは人文科学、社会科学、自然科学、そういった広い視点から法然仏教学の総合的な学術研究を行い、もって文化の発展に寄与すること、これを基本的な目的と位置づけております。先ほどからお話をさせていただいておりますように、元来佛教大学は浄土宗の僧侶の養成、これを目的とした学問所、これが当初明治の元年に知恩院山内に設立され、そこが大学の原点であります。従いまして、本学の教育組織の展開は仏教に基づく優れた人材の養成、これを基盤としておりますが、その根底には浄土宗の開祖でいらっしゃる法然上人の思想、これを離れて本学の社会的存在意義を語ることもできないと位置づけることができます。加えまして、法然上人の思想、これは日本の仏教の単なる一宗派の枠組みというようなところに収まるはずもない、そういう歴史上の偉観というものを有するものであり、世界に発信すべき優れた内容を、その教えの中に備えているという点に関しましては、皆様も十分にご認識いただけたところであろうかと思います。

一方、その思想は、今申しましたような重要性を有するにもかかわらず、他の宗派、諸宗の祖師に比べますと、実像解明に関する部分では必ずしも研究が十分には進んでいないという、そういう状況を持っているところがございます。そのような原因の一端に関しましては、法然上人の自筆の文献の少ないこと、希少性というようなものもありますが、法然上人のお弟子さん、弟子の伝承した文献でありますとか、あるいは写本、版本、こういった書物等に至っても、その動向が不明瞭なものが多数みられ、基礎研究としての文献研究において重要な役割を果たすテキストそのものが、いまだにままならない状況にあり、そのような中であっては、法然上人の実像解明は極めて困難であると言わざるを得ないと

思われます。他方、法然上人を巡ります思想家や浄土教思想研究に従事をする研究者、これは世界中に存在いたしております。そして、その世界の各地で行われている研究、その成果がどのようなものであり、またいかにして研究を進めているのかを、しっかりと把握し、関連する情報を統合して、また発信することも、法然上人の研究を志す者にとって大変有意義なものであると考えます。そのような意味から、私たちのこの研究センターにおいては、散逸する文献の収集でありますとか、あるいは現存の写本、版本や弟子の伝承から、原本、もしくはそれに近い法然文献の比定、定本の確定、そして解説作業というような一連の基礎研究を、まずしっかりと進めることをベースとし、その上に立脚した、確固たる法然思想と歴史的事実の解明、さらには法然上人周辺の実証的研究、さらに関連する歴史の解明、そして浄土宗の歴史解明を進めながら、それを広く社会に発信していくこと、これを大きな目標として掲げさせていただいております。以上のような目的、あるいは目標のもとで、本研究センターは法然仏教学研究の推進、そしてそのもとでの優れた研究者の養成という建学以来の大学の使命を果たすために、これまでの100年をこえる本学の歴史、あるいは伝統を踏まえながら、文献研究の基礎の上に、歴史的、そして文化的、社会的な観点も含めた総合的アプローチを行いつつ、法然仏教学の確立、そしてその成果の社会への発信ということを行ってまいりたいと思います。

今年の2月にお亡くなりになられました、本学の元学長でいらっしゃいました水谷幸正先生は、多年にわたりこの大学の発展にご尽力をいただいた、文字どおりこの大学を作り上げてこられた先生でございますが、その水谷先生が生前に繰り返し口にされていた言葉が、「佛教大学は法然上人の心を心とする大学である」でありました。仏教を校名に冠し、建学の理念を仏教精神とする大学ではありますが、とりわけ法然上人の心をこの大学の心とする、そういった大学として、これまでも、そしてこれから進んでいく必要があると、私は水谷先生の教えを受け止めておるところでございます。その意味で、法然上人の心というものを大学の根幹に据えながら、その法然上人自身の本当の姿というものを、しっかりと基礎から研究し、そしてその神髄を、今こそ、これからやってくる非常に困難な時代において、多難な時代を迎えるからこそ、それを社会に発信し、また本学の学生の教育にしっかりと結びつけて取り組んでいかなければならない。そういった思いも込めまして、法然仏教学研究センターの開設、これを急ぎ進め、何とかこの4月から開設することができた、実際の研究が本格的にスタートしたというところでございます。

まだ動き出したばかり、産声を上げたばかりの研究センターでございますので、本日、活動を開始したところの状況を皆様にご紹介させていただき、また第2部では内田先生、あるいは釈先生から本研究センターがいったいどこをどう目指していくべきか、というようなことについてのご示唆もいただきながら、皆様方のご理解、あるいは皆様方のご協力をもって、しっかりと研究センターの活動を推進してまいりたいと思うところでございます。



その決意を最後に申し述べさせていただきます、雑駁ではありますが、本研究センター開設の経緯について、私からの紹介とさせていただきます。このあと長丁場になりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

**伊藤** 山極先生どうもありがとうございました。それでは続きまして、研究センター研究員、仏教学部教授、本庄良文より研究センターの研究体制や状況、現在の研究班の内容などについてご説明を申し上げます。本庄先生よろしくお願いいたします。

**本庄** 山極センター長による「開設の経緯」においては、当研究センターの設立までの経緯と、広範に亘る研究の概要の説明がありましたが、無論そのすべてを現時点でカバーすることはできておりません。そこで私は、あくまで現在の研究の基本方針とやや具体的な内容を申し述べたいと思います。

### (Ⅰ)「法然仏教」ということ

まず、「佛教大学法然仏教学研究センター」というタイトルのうちの「法然仏教」について、若干申し上げたいと思います。

まず、そのご生涯を振り返ってみますと、お生まれになりましたのが1133年でございまして、美作国、今の岡山県の地方豪族の一人息子さんとしてお生まれになったわけでございますが、9歳のときにお父さんが夜討ちを受けてお亡くなりになりました。13歳、あるいは15歳のときに比叡山にお上りになりまして、そこで、いかなる修行も叶わない自分というものに向き合われまして、たくさんの書物を読まれた揚げ句に、43歳のときに浄土宗に帰依されたわけでございます。その後、九条兼実といった著名な人たちとの交流を持つというようなことがございましたけども、弾圧に合われて、西暦1207年には四国のほうに流罪に合われるということもございました。1211年、やっとのことで京都に帰ることを許されましたけれども、翌年1212年に数え年80歳で、知恩院で亡くなったわけでございます。

①弥陀一仏への信順と、「専修念仏」を基調とする「浄土宗」を新たに唱え出したこと、②それがいわゆる「鎌倉新仏教」の先駆けとなったこと、③またそれが一種の社会現象ともなり、共感も反発もともに比類のなかったこと、④政府の弾圧を受けたこと、⑤多くの弟子たちを擁し、その流れが現在まで続いていること、⑥阿弥陀仏像や法然像などの美術品の作成を惹起したことなど、その広がりや規模は極めて巨大なものです。このことは、日本という地域や平安・鎌倉という時代に留まらない、法然思想の普遍性を暗示しています。これは、先ほどセンター長が「法然上人の思想は日本の仏教の単なる一宗派の枠組みに収まるはずもない歴史上の偉観をなすもの」と言われた通りでございます。

「新宗を立てる」ということひとつをとってみても、これがいかに巨大なプロジェクトであったかに深く思いを馳せる必要があります。法然は、自分が浄土宗を立てる目的について、「善導の解釈によって浄土宗を立てることで、だれもが、いかなる悪人でも、報土、(ちよっ

と難しい言葉ではありますが、阿弥陀仏が修行の報いとして建設された真実の仏の国でござい  
ます)としての極楽浄土に往生できるということ(これを難しい言葉では「凡入報土」と申し  
ます)を明らかにするため」と言っています(『昭和新修法然上人全集』481頁、取意)。逆に  
申しますと、法然上人によりますと、「この、凡入報土の道は、浄土宗以外の宗派によっては  
不可能である」ということになるわけであります。私どもは普段、浄土宗があるのが当たり前  
の生活をしておりますけれども、このように主張するためには、いかなる手続きが必要であっ  
たかをよくよく考えてみる必要があると思います。それは、佛教思想を隅々まで正しく理解し、  
浄土宗以外にそのような道はないということを論証する手続きにほかなりません。実際、法然  
上人は、ありとあらゆる仏典に目を通し、一切経に至っては5回も読まれたといわれておりま  
す。上人は、「いかなる修行も叶わない身(三学非器)」である自己を深く凝視しながら、これ  
を独力で成し遂げたわけであります。

従来、法然上人の思想は、「法然浄土教」とも言われて来ましたが、当センターに「法然仏  
教」という呼称を冠するのは、このように、仏教全体を深く探求した上で築き上げられ、多方  
面に影響を与え続けている法然思想の巨大さ、普遍性を言い表わしたものです。

## (II) 原典・原資料に基づく基礎研究——本文確定と訳註

当研究センターの研究の基本的性格は、あくまで地味に原典、原資料に基づいて研究を進め  
ていくという点にございます。

法然思想が、他の宗派の祖師に比較して解明が遅れていること、およびその理由が、直筆や  
それに近い資料が極めて少ないことに求められるとのセンター長の話がありました。弘法大師  
空海、親鸞聖人、日蓮聖人、道元禅師などと比較すればその落差は明らかであります。(また  
これらの宗祖が、宗派内に止まらない関心を呼び起こしていることを同時に気付かされます。)

石井教道・大橋俊雄『昭和新修法然上人全集』(1955)が全体としては使い易い、貴重な研  
究資料となっていますが、個別の文献を扱うとなりますと、話は違って参ります。先ほどの話  
にもございましたけれども、オリジナルに近い善本がどれなのか、どのような読みが適切なの  
か、といった点についてはまだまだ未確定な部分が残っています。

一般的に申しまして、どのような資料でありましても、内容を理解するということと、本文  
の確定(どういう読みがよくて、どういう読みがそうでないかを決めること)とは相互補完的  
な関係にあり、本文がはっきりしないのでは内容は不明確であり、内容が筋道をもってちゃん  
とわかっていなければ、どのような本文が適切であるかが逆に分からないわけであります。ち  
ゃんと校訂されていない本文を読んだ結果導き出された研究成果は、いわば砂上の楼閣となる  
危険性を孕んでおります。その意味で、正確な現代語訳の蓄積は喫緊の課題となっています。

ところがその現代語訳の蓄積もまだまだ充分ではありません。一般向けではわずかに『日本  
の名著』シリーズ(中央公論社)の『法然』や、石丸晶子『法然の手紙』(人文書院)があり

ますが、絶版であったり、すぐ絶版になったりします。大橋俊雄『法然全集』3巻（春秋社）は、立派なもののですが、改良の余地のあるものでもあります。他に、浄土宗内のものとしては、浄土宗総合研究所『法然上人のご法語』①②③や、知恩院浄土宗学研究所編集委員会『法然上人のお言葉』（総本山知恩院布教師会発行）などがあり、良心的なもののですが、あくまで流通が宗内に留まっております。大掛かりなものとして四季社版の傍訳シリーズが出揃い、かなりの分量となりましたが、大変高価なもので（一冊16,000円で全12巻!）、また非常に残念なことには、出版社が倒産してしまっております。（力作ぞろいなのでこれがもっと安価で手に入りやすいものになるとよろしいのですが…。）

このような状態ですので、法然研究を盛り上げようとか、法然上人への関心と呼び覚まそうとか、あるいは社会に還元しようとか申しましても、やはり限界がある現状になっております。

研究班では、本文の確定と、現代語訳、訳註を基本的な作業といたしております。これには、これには一石二鳥の効果が期待できます。第一に、現代語訳を用意することは、研究者に利益を齎すのはもちろんですが、一般社会の関心と呼び覚ますことにつながります。第二に、「翻訳は究極の精読」（村上春樹）と言われるように、現代語訳すると、細部にこだわりながら深く文章を読むことになり、それが今まで気がつかなかったことに気づかされる機会となり、またそれがさらに重大な問題の発見や解明に繋がって参ることも多いのであります。この作業を通じて、われわれ自身のレベルアップを図り、同時に、若手研究者の育成を図ることができると考えております。

### （Ⅲ）多角的ということ

このセンターは、昨年、佛教大学総合研究所のプロジェクトとして始まりました「法然仏教の多角的研究」を母体と致しておりますので、その「多角的」とうことについて少し申し上げたいと思います。まだまだ理想には程遠い状況でございまして、まだ作業はその端緒についたばかりでございまして。特に文献研究に偏っている点が、大いに改良の余地のあるところでございます。ただし、その範囲内でありましても、出来るだけ広がりをもった形態を取るよう心掛けています。また、「これから研究プロジェクトを始めるんですけど、何をしましょう」というようなことではいけませんので、水面下ですでに進行しているものを、できるだけ選んでやっております。具体的には、本年（2014）四月に出ました「佛教大学法然仏教学研究センター」と題した「パンフレット」（当日配布、6頁分）の通りです。

研究の組織形態と致しましては、従来の佛教大学総合研究所の仏教学・浄土学関係のものとはやや異なった形を取っているかと思っております。すなわち、従来は、研究を統括される方がトップにおられ、その他のメンバーが横一列に並び、定期的に研究発表して、最後にそれを纏める、という形が多かったのではないかと思います。それに対して、私どもは、全体の組織を、まず複数の班に分け、班長を設けてそこにゆるやかな独立性を持たせたということが、ひとつの特



徴と言えると思います。こうすることによって、平行的に少人数で多くの会合を持つことができ、より多くのメンバーに責任とやりがいを持って頂けるのではないかと考えています。他方、一人で沢山の研究班に所属することが難しいというのが難点となっています。けれども、定期的に全体会を開くことと、常時インターネットの掲示板に、各研究会の開催日時、場所、進行情況をアップすることで、全員が全ての班の動向をキャッチできるようにしてその難点を緩和しようと試みています。

## 研究組織

全体は三つの部門から成り立っております。第一部門は、『選択本願念仏集』を中心とする法然上人の教義解明となっております。第二部門が、法然上人に至る中国の思想家、及び上人より後の時代の思想家の研究、加えて、法然上人を取り巻く周辺の思想家の研究というのが、その内訳となっております。そして第三部門は、浄土宗における僧侶養成、あるいは教育、教化の研究となっております。そして具体的な中身については次のようになっております。

### 第一部門 法然の教義解明と『選択本願念仏集』などを中心とする基礎研究

#### (1) 法然文献班 (班長：角野玄樹)

##### ①元亨版『和語灯録』

法然の法語を、法然の曾孫弟子にあたる了慧道光が1321年に木版で出版したものです。鎌倉時代までに成立した法語集として『醍醐本法然上人伝記』や親鸞書写『西方指南抄』などと並んで極めて重要です。江戸時代に出来た新しい版の『和語灯録』の現代語訳はすでにあります(塚本善隆編『法然』中央公論社、日本の名著シリーズ)が、最も古い元亨版の現代語訳注はまだ世に出ていません。

故岸一英教授をコーディネーターとして佛教大学四条センターで行われていた連続講義(平成10年10月より同16年4月)で、担当者(岸、藤堂俊英、真柄和人、本庄、安達俊英、善裕昭、伊藤真宏、角野玄樹)が用意した現代語訳注を、本文との対訳にして出す計画が、藤堂俊英佛教大学教授を中心に進められていますが、この班は、おこがましい申し方でございますが、それを後方支援するためのものと位置づけられます。現在は、岸先生の遺稿を検討しています。

##### ②桑門秀我『選擇本願念佛集講義』現代語訳・註(班長：本庄良文)

法然の主著である『選択集』にはいくつか現代語訳が出ています(服部英淳訳=大東出版、石上善應訳=日本の名著、善裕昭・本庄訳=四季社など)。解説書は定評のある石井教道『選擇集全講』(平樂寺書店)を初めとして膨大な蓄積があります。それぞれに特長がありますが、この『講義』は浄土宗鎮西派の伝統宗学に基づくものです。

従来、『選択集』のように宗義を述べた文献の研究は、各宗派、流派(佛教大学の伝統は二

祖聖光の流れを汲む「鎮西派」の中で「師資相承（師匠から弟子への継承）」によって行われ、それが膨大な解釈の伝統を成してきましたが、特に戦後、歴史学を初めとする広い視野から研究されるようになり（これは『選択集』に限りませんけれども）、いわば「自由化」の流れを形成しています（例えば宗内の田村圓澄、伊藤唯真、宗外の平雅行）。このことは、宗派、流派の固定的で閉じた視点によって、とかく偏りがちな宗祖（法然）や浄土宗教理の研究にとって大いに歓迎すべきことです。特に平雅行先生（大阪大学）の研究（『日本中世の社会と仏教』塙書房、1992）は、傑出したものであり、法然研究に多大の影響力をもち続けています。

他方、その「自由化」の過程と逆比例するかのように、浄土宗の伝統的な解釈を一身に体现するような偉大な研究者が減少し、ついには絶滅の危機に瀕していると言っても過言ではありません。そのためもあってか、「自由」な研究から投げかけられた課題にたいして、宗派、流派として満足な応答ができない状況になっています。例えば、これは、すこし細かい話になってしまいますが、平雅行先生から投げかけられた、「法然の画期性は、念仏以外の諸行による極楽往生を完全否定した点にある。よって、諸行による往生を理論的に認める鎮西派は、法然の専修念仏の思想を正しく継承したものとは言えない。」とする説に、浄土宗（鎮西派）から、満足な反論がなされているとは言えません。逆に浄土宗の多くの研究者が平説に共鳴している現状です。宗派が伝統宗義で凝り固まるのも問題でしょうが、伝統宗義を継承するはずの人々の多くが伝統宗義に通じておらず、通じていてもその立場からの発言が少ないとすれば、閉じた宗義に凝り固まるのと同じくらいに問題であろうと考えます。

では、伝統的にはどうかということが問われるわけですが、桑門秀我先生の『選擇本願念佛集講義』（1893）は、まさしく伝統的解釈を体现した学僧による、『選択集』入門書であり、「自由」な研究の流れと伝統宗義とを対比するのに恰好の資料と言えます。協力者の上野忠昭氏とともに下訳を完成させることができましたので、これからチェックを進めていく予定です。この研究により、鎮西派の教義が、法然の教義と異なっているのかいないのか、いるとすればどのように異なっているのかを考察していくこともできる（少なくともその端緒につける）と考えます。つまり、私、こんな場所で言うべきことではないかもしれませんが、この研究はもろ刃の剣となる可能性も孕んでいるということになると思います。この伝統を継ぐところの教えは、多少、やはり法然上人とは違うかもしれない——そんなことになりかねないという点があるかなとも思っております。それはちょっとやってみなくてはいけない点でございます。

## （2）『逆修説法』班（班長：眞柄和人）

### ③逆修法会（生前葬）における説法（六七日まで）

弟子安楽房遵西の父中原師秀が、阿弥陀仏像、浄土三部経、浄土五祖像を新たに用意して自分の生前に中陰の法要を行った時の、法然上人による連続講義です。

宇高良哲先生による諸本の翻刻・研究（『逆修説法諸本の研究』文化書院 1988）によって資料が充実し、そのうちの最良の本文（古本系）に基づいて二つの全訳（大橋俊雄『法然全集』春秋社、真柄和人『傍訳 逆修説法』上下巻、四季社）も出ておりますが、改訂の余地があります。

この資料の重要性や研究上の意義は以下のように考えられます。

- (1) 『選択集』以前の法然の思想が展開されている。
- (2) 『選択集』に述べられていない多くの論点を掲げる。
- (3) 伝統宗学の中では十分に活用されておらず、未解明な部分が多い。
- (4) 諸本の綿密な対照によって法然思想をより明確にできる見込みがある。

この研究班では、最良の本文に基づいて現代語訳・注を作成することを通して内容のより良い理解と、より良い本文の確定を目指しております。

## 第二部門 浄土宗高祖善導、二祖聖光、三祖良忠等、浄土宗の思想伝統の研究と周辺宗教者の研究

### (3) 『摧邪輪』班（班長：米澤実江子）

法然研究のためには、同時代人が法然上人をどのように見たかを知る必要があります。上人を厳しく批判した多くの同時代人のうち、最も充実した資料、『摧邪輪』三巻（及び『摧邪輪 莊嚴記』一卷）を今に遺しているのは明恵です。上巻については日本思想大系（岩波書店）に訓読と注（田中久夫）、現代語訳（塚本善隆編『法然』中央公論、日本の名著シリーズ、佐藤成順訳）があり、典拠の調査（末本文美士）や研究も少なくありませんが、上巻以外については解明が十分ではありません。班長（米澤）は、長らくこの文献の研究に従事しており、他の班員の協力を得ながら中巻の訓読と現代語訳注を準備しております。

### (4) 門下班（班長：伊藤茂樹）

門下班では、門下（門流）研究の現状や歴史を再確認することを主眼とし、思想研究に留まらない幅広い視座をもって以下のような作業を行います。

- (1) 法然門流研究の現況分析
- (2) 聖光・源智・良忠の研究目録の整備
- (3) 上記三者以降の鎮西義研究、西山派、時宗その他の門流についての研究目録作成

### (5) 『往生要集鈔』関係班（班長：南宏信）

浄土宗三祖良忠には最初の本格的な『往生要集』註釈書（全8冊）があり、大谷旭雄先生のすぐれたご研究がございます（「『往生要集義記』について」『法然浄土教とその周縁』、山喜房仏書林）。従来『往生要集義記』（『浄土宗全書』15）として知られておりました。ところが近

年、研究が進み、実は『義記』は寛永年間に本来の『往生要集鈔』を改編して出来あがったものではないかと論じられております（本庄・南宏信に論考があります）。寛永期以降の版本以外に、古い写本が多く見つかっており（佛教大学所蔵の中世写本を含む）、興味深い点が多々ありますので、本文の確定、現代語訳註の作業を行っております。

この書の重要性および特徴は、以下の点に求められます。

- (1) 註釈される『往生要集』そのものの重要性（思想、文学、芸術等や、何よりも法然仏教への多大の影響）
- (2) 法然以来の浄土宗の立場からの解釈を打ち出しながらも、通仏教（俱舍学・唯識学などの仏教基礎学）の立場からの検討を怠らないこと
- (3) 著者が本来、源信・法然らと同様、天台僧であったことから、天台浄土教の貴重な遺産を受け継いでいると考えられること
- (4) 著者最晩年のものであることから、著者の最終的な立場を表わしていると考えられること

南班長は、精力的に諸本の蒐集・分析を行っており、本庄は、研究班発足以前に第一冊の訳註を完成させております（『浄土宗學研究』21以下等に連載）。本研究班は、先行研究の土台の上に立って善本の翻刻、訓読、訳註を目指しております。

#### （6）中国関係班（班長：齊藤隆信）

三祖良忠による宋代中国浄土教受容を探ることを一方では課題としておりますが、他方、法然仏教に至る浄土教の歴史の解明に寄与すべく、道綽『安樂集』の現代語訳を行っております。すでに全訳は出ております（『聖典意訳七祖聖教』上巻、本願寺）が、今回は、鎮西派に伝わった註釈類を参照しながら、中国語学の進展に見合った訳文を目指しております。

### 第三部門 浄土宗における僧侶養成（伝法）、教育・教化の研究（班長：眞柄和人）

浄土宗における僧侶養成、教育、教化の研究でございます。浄土宗では14世紀から15世紀にかけて活躍された、法然上人から数えて七代目の七祖聖岡上人〈1341-1420〉によって、伝統的な教えを継承する独特の方法が考案され、現在に至っております。研究組織は、さらに二つの部門に分かれておりまして、教義を伝える部門（伝宗）と、大乘菩薩の戒を授けて行く部門（伝戒）とであります。しかし、教義を伝える書物（伝書）などの内容には、「秘儀」となっている部分もあり、学術的なメスが入れられたことがありません。メスを入れてどこまで公開していいものかということも、ちょっと難しいわけでございます。まずは、そのような部分をも含めて、問題点がどこにあるかを探るところから始めております。端緒として伝書のひとつである『真葛伝語』の本文を確定しながら訳註を行っております。

また研究員の個別の関心に応じて、七祖聖岡の思想や菩薩戒の研究を進めております。

(IV) 法然仏教の特色（浄土仏教の特色を含めて）

以下、私見を交えて法然仏教の特色を述べてみたいと思います。

(1) 日本思想史を画する大思想であること

これは最初に申し上げた通りでございます。

(2) 「宗」の純粹化（当時の状況では各宗が教義的に宗の体をなしていなかった？）

これは、まだちょっとやってみないと分からない部分がございます。

(3) 凡夫の実態に即した「無理のない道德性」の推奨

(4) 人間を分け隔てしない幅広さ（高位の菩薩から極悪非道の悪人までを含むスケールの大  
きい救済論）

(5) 怨親平等思想（敵対するものも縁である。共に極楽へ。）

この点は、特に現代の社会に貢献する点があると考えます。

(6) 自己反省の上に立った「愚鈍」ということの重視

『一枚起請文』という短い法語がございます。ご存じの方も多いかと思いますが、「愚鈍」は、そこに説かれているキーワードでございます。

以上、やや細かい点が多くて、伝わりにくかったかとも思いますが、現在、どのような研究をしているかを申し上げた次第でございます。あくまでも、地味なことをやっているなあ、というようなことでまとめられるかと自分では思っております。ちょっと長くなってしまいましたけれども、以上でございます。

どうもありがとうございました。

**本庄付記** 当日は、配布資料に基づいて口頭で説明を行ったが、時間の関係で端折った部分が多い。ここでは配布資料と説明とを適宜、繋ぎ合せることとした。やむを得ず、書き言葉主体の文章に、話し言葉を混在させた点、ご容赦をお願いしたい。

**伊藤** ありがとうございます。それではここで10分程休憩させていただきます。14時35分から第2部を始めさせていただきます。いよいよ第2部、内田先生、釈先生のご登壇いただきまして、センター長、本庄先生とトークセッションでございますので、どうぞご期待ください。受付のところで学校法人佛教教育学園、この佛教大学を設立している法人ですが、学びの茶というお茶を作っているんですが、皆様どうぞ自由にお取りいただけますので、受付のところまでご足労ですが取りに行ってくださいましたらお茶を飲んでいただけますが、全然冷えておりません。申し訳ございませんが、どうぞよろしくお願いいたします。では、休憩いたします。



## 第II部 トークセッション「法然仏教学研究センターへの期待」

**伊藤** 休憩時間中も、内田先生、釈先生、大変ファンが多ございまして、今も釈先生がご本にサインを書いておられるというようなことですが、先生方にご登壇をいただきました。それでは、第2部を始めさせていただきます。これよりはトークセッションでございまして。コーディネーターは、センター研究員、仏教学部准教授、曾和義宏が務めます。それでは曾和先生、よろしくお願いいたします。

**曾和** それでは引き続きまして、第2部トークセッション。法然仏教学研究センターへの期待ということでございまして、4人の先生方にご登壇いただきました。まず、各先生方をご紹介します。内田樹先生でいらっしゃいます。

**会場** (拍手)

**曾和** 神戸女学院大学名誉教授、そして凱風館という武道と哲学研究をなさるといふ学塾を主催されておられます。ご専門はフランス現代思想、武道論。主著として『ためらいの倫理学』『レヴィナスと愛の現象学』等々、紹介するだけで4時になってしまうような、それぐらいたくさんのご著書をお書きで、精力的に活動していらっしゃいます。続きまして、釈徹宗先生でございまして。

**会場** (拍手)

**曾和** 相愛大学人文学部教授でいらっしゃいまして、宗教思想や宗教文化の領域において、比較研究や学際研究を行っていらっしゃいます。『ブッダの伝道者たち』、あるいは今日の関連で申しますと『法然親鸞一遍』といったご著書がございまして。

またお二方のご共著として『聖地巡礼 ビギニング』『現代霊性論』、ほかの先生方も含められてのご共著『おせっかい教育論』など、多数ご共著をお持ちでいらっしゃいます。この2人の先生がおそろいになると、何か面白いことが起こるのではないかと、それだけでこの企画が半分成り立ってるようなものでございまして。そのお二人に加えて、先ほどセンター設立の意義、あるいは研究内容を申し上げました山極センター長、そして本庄研究員と、4人でトークセッションを行っていただきます。私、先ほど司会からも紹介がございましたように、センター研究員の、佛教大学の曾和と申します。よろしくお願いいたします。

**会場** (拍手)

**曾和** さながら4頭の猛獣の檻に投げ込まれたような心境でございまして。申し上げましたように、さまざまに話題が展開していくと思いますが、その中で皆様方とともに、法然仏教学研究センターでどのようなことが研究できるのか起こる、あるいは、センターの研究はど

のように進んでいくべきかというようなことを見いだしていただければと、そのように思います。よろしくお願いいたします。

それでは、さっそく始めさせていただきます。内田先生は佛大にいらっしゃったのはこれが初めてということであらっしゃいますが、本学の、まずご印象をちょっと伺いたいかと。

**内田** 大変申し訳ないことに、時間ぎりぎりに到着いたしまして、駐車場からエレベーターホールまでしか歩いておりませんので（笑）、大学の印象を申し上げることが非常に難しいんですけど、窓から見た景色は、すばらしかったですね。

**会場** （笑）

**内田** あと、多分ミッションスクールなので、恐らくは正門から入ったところに、どんとお堂があったり、あるいは鐘つき堂があったりするのかなというふうに思っているんですけども。どうなんですか。

**釈** 今日は正門じゃなく駐車場の方から入ってしまって。すみません、私はわからないです。何度も来ているんですが、あらためて聞かれると……。

**内田** 国際基督教大学っていう学校がありまして、これは文字どおりキリスト教大学という、仏教大学といわば一対をなすような学校なんですけども、正門入ると、どーんと目の前に礼拝堂があります。ミッションスクールですから、当然なんですけど。やはりミッションスクールは、正門を入ったところには宗教的なモニュメントがどどーんと建っているっていう感じがつきづきしいと思います。来ていきなり建物に文句をつけるのもあれですけども、ちょっと校舎が立派すぎるような（笑）。

**曾和** すみません。その点につきましては、まずセンター長ではなくて、学長として答えますので、よろしくお願いします。

**山極** 内田先生には、お忙しい中、来ていただいたものですから、まだ大学の全体像をご覧いただく余裕もなく会場にお入りいただいたということですが、今ご指摘いただきました、仏教の言い方で言いますと、礼拝堂（らいはいどう）というふうに私どもは称しますが、その礼拝堂は、いま建築に向かって計画が進んでおるところであります。これも先ほど冒頭にお話ししました、開学100周年の記念の事業といたしまして、この紫野のキャンパスの耐震等に関わるリニューアルの事業を進めておりますが、その最後に、先生ご期待の礼拝堂ができあがるというふうなことで、目下、準備が進められているところでございます。従いまして、本日はご覧いただけませんが、またもうしばらくしたあとに、ぜひ2回目のシンポジウムを計画させていただいて（笑）、そのときには礼拝堂でこういったシンポジウムを開催させていただきたいということを、いまお話を伺いながら思った次第です。ただ、やはりそういった建物を、仏教の大学でありますし、ミッション系ということで、き

ちんとそれも持っているということは、大学の精神を体現するシンボルとしてやっぱり必要であり、大切なものであると私どもは考えております。

**曾和** 話題を元に戻させていただきたいと思います。そのような宗教系大学、ミッションスクールというところで、このような、いわゆる宗祖、建学の精神を生み出した人物の研究をする研究センターができたということでございます。第1部のセンター長、あるいは本庄研究員の申し上げたことにつきまして、お聞きいただきましたが、どのような感想をお持ちでしょうか。内田先生、釈先生、一言ずつお願いいたします。

**内田** 非常に危機感を持ってらっしゃるということよくわかりました。本庄先生の発表にも、研究者が絶滅の危機にあるという非常に強い言葉が使われていました。センター設立のときのオープニングスピーチで、研究者が絶滅の危機にあるということをおっしゃるのはなかなかないことです。それだけ現在の状況を正直にお話しになっておられるんだと思います。そして、全体の研究のかたちとして、まず本文の確定をしてから現代語訳をして、脚注をつけていくという、テキスト中心の研究をされるというお話でした。非常に手堅いアプローチだと思います。とりわけ現代語訳ということにかなり強く力点を置かれて、研究者内部の質の高い専門研究と同時に、一般読者の関心を喚起するというところに意欲であること、これはとても大事なことですし、僕も強い共感を持ちました。実は僕自身、今、池澤夏樹さんが編集している『日本文学全集』という全集の一部を担当しております。第1回配本が、池澤さん訳の『古事記』です。僕のは終わりのほうなんですけども、酒井順子さん訳の『枕草子』と、高橋源一郎さん訳の『方丈記』と同じ巻で『徒然草』を訳します。古典の現代語訳は、どれももう何十種類もあるわけですけども、やっぱり50年に1回ぐらいは、新訳を作る方がいいと思います。僕も、長くいろんなテキストの翻訳をしてきました。今回は中世の日本語を現代日本語にですけども、フランス語を日本語に訳するという仕事は何十冊もやってきました。翻訳を主な業績としてきたものの気持ちとしては、長く繰り返し読むに足るだけの古典は、定期的に新訳を出した方がいい。言葉の意味は1回きちんと訳せば確定するわけですけども、語義の正確さと、言葉の持つて身体性っていうのはちょっと違う。現代語には現代語だけにある固有の身体性がありまして、そこにくまなく着床しないと、古典の持つて力か読者には十分に伝わらない。この間、村上春樹さんがサリンジャーの『キャッチャー・イン・ザ・ライ』の新訳を出されましたけれど、前の野崎孝訳の『ライ麦畑でつかまえて』と比べると、何かが変わってる。何が変わったかということ、それはたぶん日本語の持つて身体性が変わっている、そういう感じがしました。この村上訳もあと50年後ぐらいに、別の作家が登場してきて、また新訳を作ることになるような気がします。書物っていうのは、頭で理解するものじゃなくて、身体で読むものだとは僕は思っているんですけど、読者の身体は時代とともにゆっくり変化する。読者の身体の変化、身体的な感受性の変化に合わせて、古典もまたそのつど解釈されていか

ないと、伝達する力が弱まっていくんじゃないかと思います。ですから、今度こちらが出される法然の現代語訳も、決定版の現代語訳だというのではなくて、50年ぐらいはこれで使える暫定的な訳だというくらいの見通しでよいのではないかと思います。そして、またこのセンターの50年後の所員たちが次の現代語訳を作る。そういうかたちで仕事が継承されてゆけばすばらしいと思いました。あともう1つ、海外との連携という話がされましたけれど、海外の仏教研究者たちと、どういうふうなネットワークを張り巡らしていくのかっていうことに関しては、あまり事業計画の中に言及されていなかったように思います。でも、ヨーロッパにおいては仏教に対する関心は年々高まっているわけです。でも、そういう関心に対応できるだけ、しっかり文献を読んでいて、教義に精通していて、仏教について語れる研究者というのは、実際にはもう日本でしか輩出されていないわけです。世界のさまざまな人文系の研究機関や大学が、仏教学を教えてくれる人材を求めているという現実がありながら、はたして日本の側の仏教系大学には、そのようなニーズに対して、海外で仏教を講じることのできる教員や研究者を育成するためのプログラムを用意されているのだろうか。そのあたりのことがちょっと気になりました。それは少し前に外国の人に言われたことなんです。せっかく仏教学について日本にはこれだけの蓄積があるのに、それが世界的な文化資源として共有されるかたちが整っていないのではないかと。ご存じのとおり仏教はインドに発祥して、中国、朝鮮半島を経由して日本列島にきたわけですが、発祥の地であるインドでは滅びてしまい、中国でもさまざまなかたちで変質を遂げて、朝鮮半島でもかつての教勢はなく、結局、東漸して、ユーラシア大陸の東のはずれの列島に經典も教義も修業の作法も保存されている。そして、空海や法然や親鸞らの偉大な宗教人を生み出してきたという歴史がある。それを私たちは国民的な文化資源として共有できている。これは世界に類を見ない国民的資源なわけですよ。この世界に類を見ない仏教文化国日本のアドバンテージっていうのに対して、あこがれを持ってる海外の研究者や仏教を学びたいと願っている人たちがたくさんいらっしゃる。そういう方たちにこれから日本の側は蓄積してきたものをどうやって贈与してゆくのか、先人から受け継いだものをどうやって世界各地の次世代に伝えてゆくのか。そのことは国際的な一つの責務として、ぜひセンターの今後のアジェンダに加えていただけたらと思いました。ぜいたくなことを言って、申し訳ありません（笑）。

**曾和** ありがとうございます。釈先生、お願いいたします。

**釈** 宗教系大学の方向性としては、大雑把に分けると2タイプあるんじゃないかと思います。わかりやすいので、浄土真宗の例をご紹介します。ひとつは龍谷大学型。これは総合大学の方向へと展開して、規模を拡大してきました。もともとは西本願寺内にあった学林なのですが、総合大学へと移行して成功した事例のひとつだと言えるでしょう。もうひとつは、大谷大学型。今なお単科大学で、中軸には「宗学を学ぶ」を据えている。ほとんどの大学

が拡大政策をとっていた時期においても、そのスタイルを堅持していた。この方向性も注目すべきところがあります。

では、この佛教大学はどうか。印象としては、拡大化総合化の方向へと進んでこられたように思います。それが、今回、このような基礎的なセンターを作られるというようなことで、ある種の揺り戻しが起こっているのでしょうか。ここ数十年の方向性とは逆の、原点回帰の取り組みのひとつなのか。もしそうであれば、大賛成です。よい契機をキャッチして、逆の方向へと引っ張る取り組みは、まさに仏教的態度だと思うからです。これは仏教の大きな特性のひとつではないでしょうか。

私、認知症高齢者のグループホームを運営しているのですが、いつも「逆方向へと引っ張る時期」を意識しています。これまでの経験でいえば、「ああ、今はちょうどいい感じだな」と思っている時期はすでにそろそろ警戒すべき時期です。なぜなら、その「いい方向」というのはやがて次第に過剰になって行き過ぎてしまうからです。そうすると、今度はまた反対方向へと引っ張る取り組みをしなければならない。具体例を挙げないと、何のことを言っているのかわかりにくいかもしれませんが。とにかく、仏教では「いくら正しい考え・行いだとされているものも、偏れば具合が悪くなる」と説きます。「正しいと思った瞬間から見えなくなるものがある」というわけです。だから私は、よいタイミングで逆方向へと引っ張る、という手法を仏教から学びました。

そんなわけで、今回のセンターへの取り組みのベースには、そういった「枠組みを揺さぶる」ような仏教精神があるのではないかと感じました。

宗教系大学は「建学の精神」が非常に明確です。だから、取り組みには「ニーズ・マター」と「ミッション・マター」の双方があると思います。ニーズ・マターというのは、今求められている課題への取り組みです。もちろんこれはどの大学でもやっています。と同時に、ニーズがあろうがなかろうが、やっていかねばならない課題です。「たとえ誰も耳をかさなくても、うちはこれをやるのだ」という取り組みですね。そこにこそ宗教系大学特有の姿勢がある。この二方向に取り組んでいくことが重要だと思っています。ですから、本日のお話はとても興味深く拝聴いたしました。

もうひとつ、私は学際研究のフィールドにおります。宗教思想研究や宗教心理の研究や宗教文化の研究など、いくつかの領域をまたいでいるわけです。そのため、宗教の研究もメインラインではなく、どちらかといえば裾野の方を研究対象にしています。そもそも枠からこぼれるものが気になる性格なものですから。あまり宗教研究者が取り上げないような、伝統芸能などにも眼を向けています。ただ、私などが好き勝手な研究ができるのも、メインラインがあるからこそです。メインラインがしっかりしていないと、裾野は豊かにならない。学際研究も進まない。

だから、宗学の基礎を分厚くさせることは、裾野を豊かにしてくれます。メインライン



である宗学の基礎を地道に続けておられる人を見ると、「あんなことやっていて、おもしろいのか」などと冗談は言いますが、本当はすごく敬意をもっています。そういう研究者たちによってメインの部分の幹を太くなる。そうすると学際（領域と領域との境界）もおもしろくなっていきます。この研究所では、裾野のほうにまで視野を入れておられるようですが、まずは地道な基礎研究をベースにしていきたいと思います。やがてそれが広がりをもてる、そんな手順になるんじゃないでしょうか。

**曾和** ありがとうございます。今、釈先生がおっしゃられました、ミッションマターのほうに、このような研究所の設立は該当するのではないかと思います。その点について、センター長、何かございますか。

**山極** 内田先生のご指摘も、あるいは釈先生の印象といいますか、ご指摘いただいた点も、いずれも本当に私たちにとって参考になるところだと私も思いますし、またのちほど本庄先生のほうからも恐らく補足があると思いますが、先ほど他大学はともかくとして、大学として、佛教大学がこの間、それこそ100年というふうな歩みの中で、ある面、ユニバーシティであることを目指し、さまざまな領域で人材養成をしていくということで、基本的に拡大の道を進んできた、そしてその結果として現在があると言えます。ただ、これは私が個人的に考えているところなのかもしれませんが、どのジャンルで教育の場を設定するにしても、ミッション的な部分というのが常に存在し続けるような、そういう大学でなければ、佛教大学である意味はないというふうに思っておりますし、学長という立場で言えば、そのことを常に意識して大学の運営を行っていると言えます。ですから、これは、ある意味では両方を追い求めるようなところがあって、欲張りなのかもしれませんが、さまざまな領域で、さまざまに活躍できるような人材を養成するということを、研究、教育を通じて行っていく。そうではあるけれども、その根幹にいつも仏教があって、法然上人の教えがあるというふうな、その連関関係が重要であって、ミッションをしっかりと実践しながら、なおかつニーズマターにも応えていけるような、そういう大学として、佛教大学が他の大学とは違った特長、あるいはその良さや個性を発揮できないかなと考えています。それが十分できているとは、残念ながら思っておりませんし、至らないところや不十分なところが幾つもあるだろうというふうに思っております。そういう意味では、先ほど示されました、大きく拡大していく大学と、一つのところをしっかりと守っていく大学とのどちらにも属さない、真ん中あたり、言葉を悪くすると、中途半端なのかもしれませんが、でもそこできちんと固有の精神を生かせるような、ミッションという部分をきちんと守って、なおかつ広がりも持てるような、そういう大学にしたいし、しなければならないというのが、いまお話を聞いていて、私が非常に強く思った点であります。内田先生のおっしゃられた、国際化でありますとか、あるいは翻訳の点については本庄先生から少し補足していただければと思います。

曾和 お願いします。

本庄 内田先生のほうから、50年に一度ずつ翻訳というのはやり直さなくてはいけないと。それは言葉というのは、身体感覚に根ざした点が多いからというお話だったと思うんですけども。まだその50年に1回の、その1回目あまり出てないという、そういうことかなと思っているわけでございます。一部分、これは法然上人の著作ではなくて、法然上人の48巻からなる伝記で、『四十八巻伝』と通称されてるものなんですけども、50年前にすごい翻訳が出ています。早田哲雄という方が、九州の佐賀県で独力でなされたんですけど。それがいまだに価値を失ってないというのがあるんですが、やはり言葉がちょっと古めかしいというのがございますね。そういうものをベースあるいは模範にしながら、新たな訳を作っていくということが、これから求められると思うのです。幸いその伝記の新しい訳がこのほど出されましたけれども、上人の著作についてはこれから先のことになるように思います。

釈 それにしても、法然上人ほどの人物で、浄土宗という大きな宗派で、しかもこんなに大きな宗門大学があるにもかかわらず、これまで決定的な現代語訳がないっていうのはちょっと驚いてしまいますが。

本庄 『選択集』のようなね、主著であれば定訳と言われる訳がございます。ございますけれども、それ以外のものになると、ちょっと初めて訳しましたとか、そういうのが多いんですね。『選択集』の周りにあるものも、現代語訳は盛んにはやられてないし、さらにその周りは、特に2代目、3代目の人とかも、（法然上人の話をしてるわけですから、2代目3代目はいいのかもわかりませんが）読み下しさもないと、そんなことがあります。昔の立派な、先ほど絶滅に瀕してるというような話をいたしました浄土宗学の巨人たちは、別に訳さなくても、全部、直読直解で読めましたので、だから訳す必要がなかったわけですけども、やっぱり戦争が終わって、漢文教育が現在のようになってきてから、特に現代語訳が求められていると思うんですけども、勉強は引き継ぐけれども、研究成果の出し方はそのまま。ちょっと私うまくしゃべれてないと思うんですけども。要は論文を書くときに、昔の先生方は直読直解でわかっているものだから、漢文そのまま引用して、ゆえにどうこう、みたいなことで論述が進んでいくんですけども、現代の人はそれをやったらいかんやろと思うんです。

釈 学生が卒論を書く際にも、基本的には「原文で読む」ということを指導されておられるのでしょうか？

本庄 はい。でも、論文を書く時に原文をそのまま漢文で出してきて解釈も訳もしない人がある。しかし、その人がその原文をわかっているかどうかというのを私、知りたいわけ、私っていうか（笑）。私どもは知りたいんで。漢文を出すだけでそのまま通過してもらっても困るんですけどということが多々ある。昔のままのやり方でやってはいけないのに、や

り方だけはやってて、中身がわかってるかどうかからんような研究です。お互い、ちょっとそれでは具合悪いかと思うわけであります。また、先ほどの私の話の資料に書きましたんですけど。村上春樹さんがどこかで「翻訳って究極の精読なんです」って言ってられて、それにとっても共感を覚えましたんです。先ほど、訳をすると、一般の人に理解していただくということもあるけれども、それより何よりも前に、自分たちが要は今までわかってなかったなということがわかるということが多々ありますので、それが一番翻訳をして楽しい、実り豊かだと思う点です。そういう経験を若いうちからして、ともにやっていていただきたいなと、若い方には申し上げたいと思っています。

それから国際的な交流についておっしゃいました。確かに仏教は国際的な学問ですので、国際的な協力というのが欠かせないと思うんですけども。そうですね、日本の一般の仏教学は、割合海外との交流が進んでいるといいますが、進まなかったら勉強にならないんでやってます。特に戦争中は、仏教学者が向こうへ行ったりこっちへ来たりというようなことがなかったので、1950年代ぐらいからと思うんですけども。われわれの、私63歳なんですけども、親の世代がようやく海外に行かなくてはいけいない。海外のトップクラスの人たちと交流しないといけないという機運ができて、それで海外に行きだして、そのお弟子さんたちが、海外との協力、あるいは協同ということを進めております。その点は仏教学の面ではかなり進んでいると思うんです。ただ、つい研究成果を日本語で書いてしまうもので、翻訳であれ、論文であれ。外国人、欧米の人たちが特に困ることが多々あるみたいです。それはだんだん改良されていると思います。ただ、おっしゃったとおり、浄土学はどうかとなったら、やはりかなり閉じているかなと思います。しかし浄土学を専攻しながら、海外へ留学してくださっている方もありますので、具体的にはこのパンフレットには載ってないんですけども、お名前（笑）——やめときましょう——そういう方がおられます。イギリスへ行って、ご本人笑ってますけども（笑）。イギリスへ行って、帰ってこられてということがありますので、実際はそういう仕事ですね。発信したり、あるいは海外の研究者に来ていただくときに、橋渡しをしていただいたりということができると思っています。ただし、内田先生おっしゃられるように、ちょっと内向きであるという、そういう印象は持たれても、しかたがない点は確かにございます。

**内田** 僕は「グローバル化」とか「国際化」とかっていうのは、それ自体に価値があるとは思ってないんです。でも、現代語訳するってことが精読を要求するのと同じで、母語で書いた文章を別の外国語に置き換えて、自分の海外のカウンターパートに向かって説明するっていうことってというのはたいせつな仕事だと思います。やればわかりますけれど、自分が母語でわかったつもりでいる概念や感覚が国際共通性を持たないものであることが痛感される。それを外国の人に伝えるためには、食べ物と同じで、料理の仕方が全然違うのでどうしても口に合わないという食物でも、徹底的に砕いて砕いて、ばらばらにしまえば、

蛋白質とか、脂肪酸とか、そういう人類共通のかたちになんて還元することができる。それなら食文化の違う間でもやりとりできる。外国語に訳すというのはそれに似ているのだと思います。自分が知っているつもりでいることを徹底的に解体して、国際共通性のある基本的な単位になんて分解する。国際化というのは、そのための絶好の機会だと僕は思います。日本語で書かれたテキストを外国語に置き換えるのは、試練でもあるし、学びの機会でもある。その点で、僕はインターナショナルなかかわりはすごく大事だと思っています。それは自分が持つ「パッケージされた情報」をそのまま向こうに持っていったって使えないということに気づく機会だからです。「パッケージ」された情報は母語的な文脈込みですから、それをそのまま宗教的文脈の違うところに持っていったって、そのままでは使い物にならない。「神」という基本語一つにしても、そのままでは共約不能なわけです。宗教について語りながら、基本語が翻訳不能である。でも、その出会いと、そこで経験されるある種のコミュニケーション不能状態を通じて、改めて自分たちの種族の宗教文化の特殊性や、その個性や深みや味わいが初めて際立ってくる。だから、今の大学でさかんに言われている「じゃあ、英語で授業やればいい」とか、「英語で論文書けばいい」という話をしているんじゃないんです。民族文化の固有性は簡単には外国語では表現できない。その困難さに直面することが自国文化を反省的にとらえるよい機会になると思うからこそ、僕は外国語を日本語にする、日本語を外国語に書き換えるという作業が好きなんです。そういう立場から一言申し上げました。

**本庄** 仏教学を専攻する人たちは、割合そういうことを実際にやっていて、というのは自分が研究している内容を、英語やドイツ語やフランス語で何とか頑張って表現しようということもやっておりますけども、やはり浄土学となると、繰り返しになりますけども、稀な例外を除いてあまりそういうことができてないかなと思います。ただ龍谷大学では、そういう英訳のセンターがあつて。

**釈** そうですね。浄土真宗の書籍を英訳する部門があるようです。英語の仏教事典なども発刊したりして。また宗派でも国際部があつて、そこでも聖典の翻訳をやっています。

**本庄** そこに仏教学のすごい先生が行かれて、アドバイザーみたいなことやおられるように、聞いたり、あるいは記憶に残ったりしてるんですけども、具体的なお名前、残念ながらもう亡くなりましたけれども、長尾雅人先生という方がおられて。その方は世界的な仏教学者なんですけど、そういう、世界からも知られてるし、ものすごい尊敬もされてるし、という人なんですけども、その方が龍谷大学のそういう組織に行かれて。龍谷大学ではなくて浄土真宗（本願寺派）ですか。

**釈** 長尾先生は京都大学退官後、龍谷大学で仏典翻訳や後進の指導にあたられていました。仏教文化研究所に所属されていたように思います。今だと桂紹隆先生などがおられまして、世界的な仏教研究が続いています。

翻訳って、難しいですね。「信心」といった言葉ひとつでも長い議論があります。faith だとか true mind だとか、いろいろやってもびったりこない。結局、shinjin なんてそのまま使ったりして。

**本庄** 浄土宗の場合は、宗で英訳のプロジェクトがありますので、そことの連携とか、あるいは相互協力とか、そういうことができたらいいかなのと思うんですけども。これもここだけの話なんですけども、人材がちょっと、龍谷大学とかと比べると（笑）。

やはり絶対数が本当に、龍谷大学、うらやましいの一言なんですよね。人材がたくさんおられると思います。特に海外に出て、活躍しておられる仏教学の先生が、浄土真宗の学問も同時にやられて、英語も堪能でというそういう存在ですね。長尾雅人先生や桂紹隆先生のお話が出ましたが、お二人は先ほど申しましたように、海外の方々から深く尊敬されている方で、それこそトップクラス中のトップクラスなんですけど。そういう方が、わが浄土宗でもこれから出てくるということで、期待したいと思っております。

**山極** 自分のことを言うのはやめようと思っていたのですが、内田先生のお話を聞いていて、少しだけ話をさせていただきます。私も専門は仏教学なんですけれども、今思えば本当に冷や汗が出るような思いで、インド語文献のテキストをドイツ語に翻訳して、ドイツ語訳を出版をしたという経緯があります。そのとき先生がおっしゃっていたように、自分のドイツ語力のなさを本当に痛感しました。そこにある翻訳、インド文献のドイツ語訳なんですけど、それは本当に私が書いたものなんだろうかというふうに最後は思うくらい、やっぱり多くの先生や仲間たちの批判、あるいは修正を経て、何とか公表することができたんですけど、そうなりますと、ものすごい試練といいますか、それこそ1語の翻訳を巡って、安易に右から左に辞書で置き換えるようなものは駄目であるとか、そんな言葉は今使われてないから、そう訳すべきじゃないよっていうようなかたちで、それはもう母国語の人にしかわからないような状況の中で、それでも翻訳を完結させなければならないという想いだけがあって、何とか最後まで辿りつくことができたという状況でした。振り返れば、よく最後までもったなと自分でも思うくらい、それはきつく厳しい体験でもありました。そんな体験でもありましたので、ですから余計に、そういうことを経ていかないと、もちろん内田先生は経験を経て、あるいはお力を培って、なさっておられるわけですが、そういう苦労とか、大変さというようなものをきちんと経験して、研究者として独り立ちできていくような、そういう後継の若い研究者を育成していく場でなければならないということが、実はこの研究所の設置の目的の根幹であり、一つの非常に大きな柱であろうと思います。今、本庄先生がおっしゃられましたように、よその状況を見たとき、心もとないのであれば、そこをしっかりと作っていく。そういうふうな理想とする状況に進めるように、大学も、あるいは大学だけではなくに、浄土宗との関係もありますが、そういうところで人材養成をしていかなければいけない。そのときに、先ほど来の、本庄先生のお話



にもあるように、まず日本語として、現代語として、きちんと覚悟を持って訳せるかどうか、訳しきれるかどうか。それは50年たつと変わるのかもしれませんが、今の時点でどうなのかっていうことを、やっぱり研究班のところではしっかりとやっていただく。その試練が次につながっていくというような研究の場をしっかりと形成し、まさしく地味な、地道な作業ではあるけれども、そのことが次代を担う、あるいはその成果としての現代語訳が、法然上人の真の偉大さを社会に広めていくというふうなかたちにつながっていく。これは理想ではありますけれども、そういうことを目指さなければいけないというように、改めて思った次第です。

**曾和** ありがとうございます。もうコーディネーターは、要らないんじゃないかな、ぐらいに思います。ここまで二つ話の方向性が見えてきたかと思います。一つは、釈先生がおっしゃられました大学拡大の型、先ほどのニーズマターとミッションマターの二方向性という話の中で、こういうセンターの設立は、非常に喜ばしいというおほめの言葉をいただいた、設立自体の方向性と、もう一つやはりその研究の内容にかかわってくる二つの話題を提供いただいたように思いますが、まず一つ目のマターの話、ミッションマター、ニーズマターということですが、今日はこの前に座っておられる先生方、皆ミッションスクールといえますか、宗教系大学の教鞭を取られたり、ご出身であつたりということでございますけれども、佛大の場合では、法然上人のことを、どれだけ学生が多く知っているかという、教えている側としては非常に忸怩たる思いを持つような現状ですけれども、神戸女学院大学であつたり、相愛大学、あるいはご出身の龍谷大学で、そういった宗教、あるいは宗教系大学であるというのは現状でどれぐらい意識されたりしているかということについて、外部のことでよく知りませんので、お教えいただけたらと思います。

**内田** 僕は神戸女学院大学というプロテスタント系のミッションスクールに21年間勤務しておりました。僕自身はノンクリスチャンなんですけれども、クリスチャンの方が院長、学長、学生部長など要職に就かれておりまして、教授会が始まる前も、重要な会議の前に必ずお祈りをする。教授会でしたら、会議の最初にチャプレンが立ち上がって、「一言お祈ります」と言って、われわれがこれから議するところが神の意にかなうものとなるよう、われわれが正しく判断を下せるように知恵と力をお貸し下さいと祈る。定型的な祈りの言葉ではあるわけですが、でも、その祈りの言葉を聴くごとに、自分たちいるこの学校がかつてキリストの御名において、アメリカ人の宣教師たちが文字通り身銭を切って立ち上げた学舎であるという来歴を思い出すわけです。そうである以上、僕たちがこれから議するところは、建学者が仮に今ここにいたら、その決定を良しとするであろうかというかたちで審問される。この学校はそもそも何のために存在するのかを、祈りのたびに大学構成員たちは確認する。それが祈りの組織的な意味だったと思います。これを単なる形式主義だと思っている人もいたかも知れませんが、僕は祈りにはつよい意味があると思いま

す。何のためにこの学校は存在してるのかというラディカルな問いをほとんど毎日のように確認するっていうのは、とても大事なことなんです。でも、そういうことって、無宗教の私立の学校や国公立の学校の場合ではあり得ないわけです。この学校は何のために作られたのか、建学者は何を目指していたのかを毎回確認しながら教授会やったり、会議を始めたりする人はいないわけです。でも、ミッションスクールではそういうことが行われている。そして、チャプレンが祈るたびに、僕は今から140年前、明治の初めにアメリカから船でやってきた2人の女性宣教師が神戸の街で小さな私塾を始めたときの風景を想像するわけです。彼女たちが開学したとき、これはまさにミッションマターなわけですし、つまり社会的ニーズがゼロだった状態だったわけですね。ゼロどころか、彼女たちの来日直前にキリシタン禁止令の高札が下ろされたわけですから、彼女たちがサンフランシスコから出る船に乗ったときには、彼女たちを歓迎する人は日本国内にはいなかった。この米国人の女性宣教師たちの到来を望んでいる人が誰もいないところに彼らはやってきた。しかし、自分にはどうしても伝えたいことがあるという強い使命感を持ったこの若い2人の女性が、小さな私塾で7人の子どもたちを教え始めるところから始まって、今日の神戸女学院というのができたわけです。社会的ニーズがないところに、自分にはどうしても伝えたいことがあると思って学びの場を立ち上げた人がある。そのことがミッションスクールの建学の基本的な構えだと思います。学校の中で学校の今後の経営方針とか、財務方針について議論になるたびに、僕は「ニーズ」という言葉を使うのを止めませんかと何度も申し上げました。社会的ニーズなんかどうだっていいじゃないか、と。だってこの学校はもともとマーケットのニーズなんかまるでないときにできたものなんですから。ニーズがあろうとなかろうと、自分たちには是非とも伝えたいことがある、伝えたいことがあるというのが私学教育の一番基本にある構えだと思います。われわれの学校には他を以ては代え難い社会的、歴史的な責務があると思えば石に齧り付いても教育活動を行えばいい。志願者がもっと増えるような学科編制にしようとか、就職がもっとよくなるようなカリキュラムにしようとか話を建学者たちの前で見えませんか。建学者たちは怒り出しますよ。私たちはそんなことのために学校を始めたわけじゃないって。自分たちがやりたい教育をして、それでも志願者が集まらなかったら、それは粛々と縮んでいけばいいわけです。もともと7人から始めた学校なんだから、150年かかって最後の学年の学生が7人だったっていいじゃないですか。そういう乱暴なことを申し上げると、快哉を叫ぶ同僚もおれば、激怒する同僚もいたわけです（笑）。だけど僕は、学校というのは、いろんなタイプの学校がなきゃいけないと思っています。どんどん拡大してゆく成長する学校と、定常的に現状維持する学校と、大きく二つに分けられると思いますけれど、ミッションスクールというのは、明らかに定常的なものをめざしている。建学者だって神戸女学院が学生数何万人というような大学になることはまったく望んでいなかったと思います。数十年後にせいぜ

い数百人程度のこぢんまりとした学舎になることを思い描いていたはずです。それでいいと僕は思うんです。その開学時点での展望の中に踏みとどまっていればいい。大きくする必要はない。そのような学びの場が、自由なアカデミアがこの日本社会内に存在しているということに十分な価値がある。むしろ大きくならないっていうところにこそミッションスクールの手柄はあるんじゃないですか。どんな時代においても、大学というのは、その社会において支配的な価値観に完全に同化するものじゃない。むしろ本質的には反社会的なものであるという気がするんです。「反社会的」というより、むしろ「非社会的」でしょうか。その社会の人々が今価値ありとして、それを欲望し、追い求めるものとは別のものに価値を見出し、それを追い求める。それがアカデミアの本来の姿ではないでしょうか。なにしろミッションスクールの場合、目指しているものは「超越者」なわけですよ。

「超越者」なんて、その語の定義からして、社会の外部に決まっている。その外部に向かって、社会内部に小さな穴が一つあいている。超越的境位に通じる回路があいている。そういう超越性への通路をこの世界の中に確保しておくというのが宗教施設やミッションスクールに負託された社会的な使命だと思うんです。この外部への回路を守り続けること。政治体制が変わっても、経済システムが変わっても、そのようなものとは無関係に、外界とこの現世世界をつなぐ回路を守り続けること。この出入り口を守る「歩哨」の仕事が大学人には託されているのではないかと僕は「歩哨（センチネル）」という言葉を使いますが、これはその回路の見張り番のことです。外界から到来するものを僕たちの社会にソフトランディングさせる。現代語訳の話をしましたけれど、起源において理解不能のかたちで与えられたものを、できるだけみんなにわかるようなかたちに噛み砕いて、伝えてゆく。この社会の中でみんなが行き詰まるように、単一の価値観に押し潰されているときに、それとは全く違うものの見方、世界をもっと根源的に見る仕方があることを伝える。そのようにして、外部への回路から、この煮詰まった世界に一陣の涼風が吹き込む。そのような回路を守ることが僕たちに課された重大な歴史的使命ではないかというふうに思っています。ですから、大学について語るときにもできるだけ市場の用語とか、ビジネスとかマーケティングの用語で語りたくない。ずっとそう思ってきました。でも、退職してからそろそろ3年ですけども、さすがに神戸女学院大学も時流に抗しきれず、次第に市場志向、ビジネスマインドな学校経営にシフトしつつあるということにかつての同僚たちと酒酌み交わすたびに愚痴を聴かされております。

**会場** (笑)

**釈** 私のほうはまた事情が違います。私が勤めております相愛大学は、本当に小さな大学なんです。仏教文化学科を作る、といったお話があって着任しました。残念ながらそれほどニーズがなくて、学科とはいえ10人程度しか入学者がいない。現在では、学科じゃなくて人文学科の中の一専攻というかたちを取っております。私は着任してすぐに大学のダウン

サイズを提言しました。どんどん受験生がきていた時期に増設を繰り返して、そのままになっている印象を受けましたので。

それと、一時期仏教系大学は、仏教的なものを前面に出さないような戦略をとっていました。中には学科名から「仏教」をはずしたりするところもあった。今、それを取り戻しつつあるんじゃないでしょうか。今回の研究所の設立は、その方向を先取りしているのではないのでしょうか。

とにかく小さな大学は、社会学が流行ったら社会学、心理学が流行ったら心理学、というような後追いをしているって、ダメですからね。小さな規模で、手取り足取り丁寧な人を育てていく。ここに入ったらちゃんと育ててくれる、そういう信頼を何年もかけて評判を上げていくのがいいんじゃないか。そう提案しました。結果的に、今はその方向で進んでおり、なかなか順調です。

相愛大学はもともと大阪の船場という商売の本場で生まれました。船場は浄土真宗の門徒ばかり集まって住んでいたところ。北御堂と南御堂というがあり、そこを結ぶ道が御堂筋です。日本各地の真宗門徒は、商売で大阪へ出てくると、この御堂周辺にお店を出しました。「お寺の鐘の音が聞こえるところで店を出す」とか、「お寺の屋根が見えるところで店を出す」というメンタリティです。そして、その門徒さんたちの子弟教育を北御堂の敷地内で始めたのが相愛大学の基盤です。今は共学になっていますが、もともとは音楽教育を軸とした女子教育の学校です。ですから、大乘仏教や浄土真宗にもとづく教育理念、大阪文化、雅楽も含む音楽教育などに特性があります。仏教と音楽とが両方ある大学というのは、日本でひとつだけのようです。また大阪市内にある私立大学は相愛だけのようです。

1年生時と2年生時に仏教や浄土真宗の必修科目があり、なぜこの大学ができて、われわれはどんな教育を目指しているかを提示しています。宗教系科目担当教員のネットワークを作りまして、非常勤の先生も含めまして連絡を取り合いながらやっています。

また、年間けっこうな数の法要があります。毎週の礼拝もある。音楽学部があるので、音楽法要はなかなか見事です。礼拝や法要の参加呼びかけも、熱心にやっています。今、ざっと思いつくままに挙げますと、そんなところでしょうか。

**曾和** ありがとうございます。そんなよその、よその取り組みという大変ですけども、それに対して佛教大学にも一応1年生教育で、「ブツダの教え」と『法然の生涯と思想』という科目があるのですが、再履修の人たちがたくさん生まれるということで有名です。このあたり、同様のことはありますか。

**釈** それはもうこの宗教系大学も似たような状況でしょう。以前、龍谷大学の先生に「4年生になっても、親鸞を『新卵』と書く学生がおった」と聞いたことがあります。

**会場** (笑)

**釈** その時はさすがに「こいつだけには単位やりたくない」と思ったそうです。

**曾和** 今の、そういったお話では、佛大と共通するところもあると思いますが、どうでしょう。

**山極** 最初のところで少し触れた部分とも重なってくると思うのですけれども、内田先生がおっしゃることは、今日の私の立場で言いますと、法然仏教学研究センター長としては非常によくわかるのですが、もう一つの立場もあるものですから、そこから見ますとなかなか難しいなと思います。現在、7000名の学生、大学院生含めて7000名規模の通学課程で学生を抱え、7学部14学科というような大きさを持つようになった。それは先ほど来、話が出ている龍谷大学に比べると、規模としては3分の2ぐらいですか。半分ぐらいですかね。大谷大学からすると倍ぐらいになるんでしょうか。というような、本学のそういった位置づけの中で考えていくと、やっぱりどっちを向くんだ、ということと、それからその中身をどういうふうに組み立てていくのか、というところで、難しい判断や舵取りを、大学全体としてはしなければならないというところがあります。従って、本当に悩ましいところではあるのですが、ただ私はやはり学長として、ミッション系の、仏教系の大学であって、仏教の精神が根底にあって、法然上人の教えが根底にあるということは、いつの時代も変わらずに持ち続けなければいけない。その中で、この大学がさらに広げられるところがあるのかなのか、あるいは、必要に応じてダウンサイジングしなければならないところもあるのかなのか。こういう問題を考えていくという点については、まだまだ大学内の十分なコンセンサスが得られているわけでもなくて、そういう意味では、そういったコンセンサスを得るのも難しい大学としての規模、非常に悩ましい大きさであるというのが、正直なところとしてあります。ただ一方で、学生、対学生といったときには、今少しお話もありましたですけれど、なかなか授業等を通じてだけで、学生に仏教のマインドを届けていくというのは、これは難しい。関連する授業はありますけれども、その授業は先ほど曾和先生もおっしゃっていましたが、あるいは法然上人の「法然」という文字は多分書いてもらえと思いますが、それでもその中身の理解ということになりますと、やはり4年間通じてもなかなか一般の学生の場合、仏教を直接的に学んでいる仏教学部、仏教学科の学生以外のところでは、しっかりと届けることは容易ではない。ですから、さまざまな宗教関連の取り組み、毎朝、朝のお勤めもしていますし、さらには関連する行事等を仏教のスタイルでやる、仏教音楽を使う、いろんなかたちで行っていますが、その内容をしっかり届けていくのは、いつも大変な難しさを伴っていると思います。ただ一方で、理想といいますが、私自身が願っているのは、この会場にも、今日はたくさんの本学の学生が参加してくれているようですが、このキャンパスの中で学生として生活を送り、この空間で空気を吸うことによって、佛大の雰囲気というようなものや、佛大の持っている特質のようなものが、肌から身に染みていくような、そういう届け方ができないだろうということ。本学の文化なり、あるいは大学の持っている性質みたいなものが、直接的



に知識として頭で考えて身につけるのではなく、いつの間にかそういう香りに染まっているといえますか、香りを身につけてくれるようになるというような、そういうかたちの教育といえますか、そういう取り組みはできないものだろうかということを、常に考えています。この点に関して、さまざまな先生方のお力を借りたり、職員の皆さんの力を借りて少しでも実現しようと取り組んでいるのですが、ままならないというのは正直なところです。恐らくそれは多くの仏教系の大学、あるいはミッション系の大学の学生さんたちについても同じなのではないでしょうか。

**釈** キリスト教系の大学は、教職員を募集する際、募集要項に「キリスト教に理解があること」という条件を付けます。仏教系の大学は、あまりそういうことをしないような気がします。

**山極** 基本的には、思想信条は問わないというのは基本だと思います。ただし、やはりこの大学が仏教の大学であることや、法然上人の教えを根幹にしている大学であるということを、やっぱり尊重してくださいということは、着任にあたってはきちんと伝えさせていただいています。

**釈** 募集要項に明示しないというのは、やはり我々はなんとなく「仏教だから、わざわざ断らなくてもそんなに抵抗はないだろう」「理解してもらえらるだろう」と思いこんでいるのかもしれない。

**内田** おっしゃるとおり、言葉とかかたちの整った教義とかいうことによってではなくて、キャンパスでの生活の中で、そこで呼吸しているうちに、しだいに宗教的なものというのは肌に染み込んでくる。僕もキリスト教に対して、特に好きも嫌いもなく、ただ拾ってくれた就職先がミッションスクールだけだったということでしたけれど、四月の入学式で最初の宗教儀礼に出席したときに、緒に口パクで賛美歌や学院歌を歌ったあとに、最後にチャプレンが祝祷を捧げた。その祝祷はこの場に臨席しているすべての人たちの上に神さまの恵みが豊かにありますようにっていうものなんですけれど、チャプレンが祝祷の構えをしたときに、ああ自分も今この祝福を受けているということが実感された。宗教的に祝福されたことって、それまで一度もなくて、それがはじめての経験だったんですけれど、なるほど祝福されるというのはこういうことなのかということが身体的にわかった。なるほど、今自分はこの宗教的共同体に一人の仲間として迎えられたんだということがわかりました。結局洗礼を受けて信者になるということはなかったのですが、宗教的な儀礼にはわりとまめに出席したと思います。教務部長になってからは、入学式・卒業式のたびに建学の精神が書かれたマタイ伝の聖句を拝読するという役目を仰せつかりまして、マタイ伝を朗々と読み上げるのですが、それを4年間で16回もやっていると（笑）、不思議なもので、聖句がしだいに身にしみてくる。チャペルでは「奨励」といって、聖書の一句を取り上げて、それを題材にして一つ短いお話をするということがあるんですけれど、それも

よく呼ばれました。大学のチャペルアワーでも何度もしたし、中高部の礼拝の時間にもやりました。すると、あの人はなかなか聖書ネタで話をするのが上手だということになって、この春は津田塾大学に呼ばれて、卒業式の奨励をすることになりました。先日はICUに呼ばれて、宗教強調週間の講師として、キリスト教と学校教育について語るという。ノンクリスチャンなのにキリスト教の教えとは何であるかというようなことを語り続けております。そういう芸ができるようになったのも、すべてはミッションスクールの生活の中で、祈りと儀礼が身についていたからではないかと思います。みんなと一緒に祈り、一緒に賛美歌を歌い、礼拝を守りという生活をしているうちに信仰は身体化するんです。信仰というのは、知性的に考えて身につけたり離れたりするというものではなく、むしろ身体的、感性的な営みだと思います。宗教的な雰囲気が身近にあれば、特に努力をしなくても、水が砂に染み込むように霊的なものに対する感受性は備わってゆく。そういうものじゃないんでしょうか。ですから、こういう仏教系の学校でも、宗教教育は、法然の事績はこうです、思想はこうですと座学で教えて、点数をつけるというものではなくて、ただ学校に来るだけでだんだん見に染みついてくるというものではないかと思うんです。学校の門をくぐると目の前に本堂があり、何気なく手を合わせて遙拝して、教室に向かう途中には鐘つき堂があり、休み時間に散策すると、読経の声が聞こえる。そういう雰囲気に身体がなじんでくると、キャンパスに一步足を踏み入れるとふっと気持ちが落ち着くとか、意識が澄明になってくるとか、心が穏やかになってくるとか、そういう具体的で、身体的な変化が感じられるようになる。そういうのが実は宗教教育の勘所じゃないかなっていう気がするんです。

**曾和** 理想的にはそういう自然と染まっていくというようなことはあればいいと思うんですが、こういう研究センターというものができるとするのは、先ほど釈先生がおっしゃったように、かなり正面突破的なプロジェクトになるかと思います。この一つ目の話題の、大学の使命といたしましては、こういう正面突破のセンター設立ということについて、お二人はどのような感想をお持ちでしょうか。

**釈** 先ほど申しましたように、ニーズがあろうがなかろうがなすべきミッションがありますので、正面突破の姿勢は高く評価させていただきたいと思います。

とにかく法然という人は日本仏教という枠だけではちょっと捉えきれないところがあります。法然思想の特異性や独自性は、やはり仏教全体で見なければなりません。ぜひとも広い視野で法然思想の立ち位置を研究していただきたい。研究所の成果を、私自身、とても楽しみにしております。

**内田** 先ほど釈先生が、裾野を広げるためには、中心にしっかりとした教学の軸がなければいけないということをおっしゃってましたけど、本当にそうだと思いますね。偏ってはいけない。中心がなければ裾野もない。そして裾野からは中心に向かって絶えず環流するもの

があり、中軸を形成する新しい血は裾野から入ってくる。僕は個人的に心痛む経験があります。僕をご紹介頂いたように、もとは仏文学者なんです。でも、日本におけるフランス文学研究というのは、実はもうほぼ壊滅状態にあるんです。僕が仏文に行こうと思ったのは1960年代なかばのことなんですけども、この頃の日本の仏文学者たちはたしかに裾野の拡大にずいぶん熱心だったと思います。桑原武夫とか渡辺一夫とか鈴木道彦とか、専門領域でもすばらしい業績があるんだけど、それとは別に政治や社会問題についても文化についても積極的に発言していた。そういう人たちを見ていると、なるほどフランス文学者ってというのは、こんなにダイナミックな生き方をする知性なんだってということが子どもにもわかった。なんてかっこいい生き方だろうと思って、仏文に入ろうという話になる。僕が仏文に進学したのは1973年ですけども、人文系の学科の中ではたぶん英文に続いて進学者が多かったと思います。文科Ⅲ類370人のうち30人以上が仏文でしたから。それがわずか30年間でほぼゼロになった。多分今日本のほとんどの学校でもう仏文科は存在しなくなった。文学部自体が存在しなくなっていますから。何でこんなになったかっていうと、それは「裾野を広げる」ための努力を僕たちの世代を含めて70年代以降の仏文学者が全くしてこなかったことに一因はあると思います。中軸的な研究はたいしたものだったんです。優秀な連中はみんなフランスに留学して、フランス語で論文書いて、フランス語で本を出した。そのうち若い研究者たちが国内学会でもフランス語で発表するようになってきた。ローカルな研究者じゃなくて、グローバルに戦える研究者なんだということをアピールしたかったでしょう。それを見ながら、僕は「ちょっとまずいことになったな」と思っていました。これでもうこの業界も終わりかなと思った。案の定、そのあと一気に終わってしまった。もちろん、世界的な水準の業績を上げている人たちはまだいるんです。でも、その人たちに憧れて仏文に進学したいと思う中高生がいらない。だって、中高生たちに向かって発信した仏文学者なんか一人もいなかったから。「仏文学研究はやりがいのある、すばらしい仕事だよ」ということを子どもたちにも実感できるような仕方でアピールできなかった。だから、仏文研究に進む学生がどんどん減って、ついにはなくなり、仏文科もなくなり、自分たちの大学教員のポストそのものもなくなった。後続する若い人たちに「僕たちがやってきたことの、これだけは受け継いで欲しい」というような訴えがなかった。いつも内輪だけで、トリビアルな研究をやってきた。もちろん、業界内部的には高い評価を受けたけれど、その成果を一般の日本人の人たちはどうやって享受できるのかということとは考えていなかった。日本語で論文さえ書かないわけですから、日本人は相手にせずということだったわけです。こちらが「日本人は相手にせず」なら、先方だって「仏文学者は相手にせず」ということになりますよ。当然です。そうやって1980年代からわずか30年で日本の大学にはもう専門のフランス文学研究者を育てる教育環境がなくなってしまった。もちろん、個人的にフランスの大学に留学して、向こうで学位を取って、研究者になること

はできますよ。でも、国内的には専門家を制度的に育成する環境がもうないんです。僕らが学生の頃にはあったのに僕たちの世代が潰してしまったんです。それは独文科も英文科も同じです。もう外国文学研究のところに来る人はいない。研究者自身が「裾野の拡大」の努力を怠っていたのと同時に、文学研究のようなものに限りある教育資源は回せない、それより実学重視だ、グローバル人材育成だ、という話になった。こうして、明治初年から、先人たちが営々として築き上げてきた英文学研究やフランス文学研究やドイツ文学研究の堂々たる伝統は消滅してゆく。そういう一業界の栄枯盛衰を短期間で目の前で見た人間としては、中軸を固めて世界的なレベルの専門研究を成し遂げるということと、国内の中高生たちの知性的、感性的成熟を支援して、自分たちの研究の伝統を受け継いでもらうということはどちらが欠けてもだめで、並行して進まなければならないと実感するんです。裾野が広がって、新しい血が次々と中軸に環流してくる安定したシステムを作らなければ、学術研究というのは保たないんです。そのことを身に染みて知りました。ですから、このセンターはもちろん、専門研究の中核的な機関になるわけですが、同時に裾野を拡げる活動にも努めて頂きたい。冒頭で、經典の現代語訳をされるのはたいへん結構なことだと申し上げたのは、裾野を広げて、世代を超えて研究を繋いでゆく仕組みを作らないと、中核的な研究のクオリティを維持することはたいへん難しくなると思うからです。そしてそのためには、このセンターで研究している学者たちの様子を見た、通りすがりの学生たちが、「法然研究って、なんかかっこいいよね」っていうか（笑）、「なんだかずいぶん楽しそうだな」って思ってくれるというのが実はとっても大事なことなんじゃないかっていう気がいたします。

**曾和** ありがとうございます。今回、裾野を広げるという意味でしたら、このこういうシンポジウムに内田先生をお招きして、だいぶお悩みさせてしまったようですが、そういう意味ではお一人裾野が広がったというふうに思っております。率直にお聞きしますけれども、法然上人のシンポジウムということでお願いしたわけですが、法然上人に対してどういうイメージをお持ちになっておられますか？

**内田** そこが問題なんです。僕たち一般人にとって、宗教人に対するアプローチっていうのは、ほとんどの場合文学作品を通じてなんです。文学作品によって宗教者たちは一つの鮮烈なイメージを与えられて、その虚構を通じて、そこから僕たちはその宗教者の思想なり、伝記的事実なり、歴史的背景なりを知ることになる。親鸞がメジャーなのは、やはり親鸞を主人公にしたり、親鸞に言及した膨大なテキスト群があるからですね。でも、法然はどうなんだろう。僕が法然について読んだ文学的言及って、それは吉川英治の『新・平家物語』で、この中では法然はたしかに極めて印象的な登場人物として出てくるんですけども、それを読んだのが小学校6年生のときで。そのあとが続かなかった。今度、ここに来る前に、Amazonで調べたら法然については中里介山が書いているものが、Kindleで青

空文庫になっておりまして（笑）、とりあえずダウンロードしてみました。『法然行伝』でしたかね。美作（みまさか）の国に生まれたというところから始まりましたから、恐らく伝記的なものなんでしょうけれど、法然を取り上げた文学作品はかなり少ない。文学的虚構を通じてであれ、輪郭のはっきりしたイメージを持つことができると、親しみを感じる。そして、そこから本格的に思想の方に進んで行く。そういう順番だと思うんです。ですから、法然を文学的なアイコンとして、どうやって一般読者にアピールするようなかたちにできるんだろうということを実は考えてしまいました。今日の準備で釈先生の『法然親鸞一遍』をにわか勉強で読んだんですけども（笑）、やはりこの3人だと、もう一遍という個性が圧倒的なわけですね。一遍、親鸞に比べると、法然は、教学的には非常に大胆な、日本仏教学の転換点を画した人だと書いてあるんですけども、人格的なイメージはうまくつかめなかった。法然、念仏、浄土と聞いて何を連想するかっていうときに、うまく連想できないのは、連想の素材になるものが、文学であったり、映画であったり、芝居であったり、あるいは音楽であったり、そういう宗教の周辺にあるものが提供してきたのだからだと思うんです。宗教というのは、宗教単体ではなく、それをめぐる多様な文化的な創造物を「込み」で機能しているものだというのをしみじみ感じました。法然の場合は、法然を同心円的に囲む文化的な資源がなんとなく足りないんだと、何となく今回思いました。法然の顔がどうしても思い浮かばなかったっていうことですね（笑）。

**曾和** どうぞ。後ろ振り向いて、よく焼きつけていただけたらありがたいです。

**内田** はい。この方ですね。

**曾和** 今、そういう意味では裾野がやはり広がってないということなんでしょうけども、どういったところにその問題があると、釈先生はお考えですか。

**釈** 前近代では、法然上人への敬慕はとても強いものでした。伝記や大師号などは、ほかの宗祖に比べて突出して多い。ところが近代になりますと、「苦悩する自我」といったものが文学における大きなテーマになる。そうなると、親鸞や道元あたりに注目が集まる。法然上人はとても完成された人格者であり教育者というイメージでしょう。親鸞や一遍のようなアウトサイダー的な人のほうが、文学的にもおもしろいのですからね。

**曾和** 今、苦悩する自我というようなお言葉がありましたが、法然上人も割と苦悩されてるように思うんですけども。

**釈** おっしゃる通りです。43歳まで自らの進むべき道を求め続けるのですから。43歳って、当時としてはけっこうな年齢です。法然上人が、善導の「順彼仏願故」の一文に出会うところなどは、すごく感動的です。とはいえ、やはり完成された宗教的人格者のイメージが強いように思えます。

**曾和** そういうイメージが焼きついてるというのは、研究面からどうお考えですか、本庄先生。

**本庄** 13歳か15歳ぐらいで、天台宗の本山である比叡山に行かれて、伝承によりますと、お父



さんが夜討ちに遭われて亡くなる直前に、あだ討ちをするなというのが一つと、それから自ら悟りを求めなさいということが一つありまして、そういう大きい課題を背負われましたので、自らのこの解脱の道ということを探し始められたわけですが、三学非器という、先ほどの話でちょっと難しい言葉を使いましたけれども、どう見ても、これ修行が自分ではできないという現実突き当たられまして、「修行はしなくても何とか悟りを開くことができるような道はないか」という、まあある意味、虫のいいといいますが、発想に至られたんですけど、やはりよっぽど苦しまれたから、何とか抜け道ないかということで、そういう道を進もうとされたのだと思うんですけども。当時の常識として、修行なしでっていうことは、ちょっとあり得ないということだったので、人に聞いてもだめだったら、そしたら自分で勉強しなくてはしょうがないなということで、先ほど少し申しましたが、一切経を5回読んで、それから当時としては、一切経に納められている以外のいろんな仏典がたくさんあったので、それらをも全部、目をとおして、最後の最後になって、善導という人の書物に出会われて、「南無阿弥陀仏」を唱えたら、誰でもが救われますと。この世では悟りは開けないけれども、極楽というところがあるんで、そこで修行して悟りを開くことができ、また人々を救うために、この世へ帰ってくることができますという、そういう筋道がずっと見えた。30年かかって、やっとその道にたどり着かれたということで。ちょっと最近ね、私も勉強させていただいて、内田先生の、『修行論』を読まさせていただいたら、坂本龍馬でしたっけ、とにかく武道の達人が、伝記の中でいきなり達人になるっていう、それを不満に思われるということなんですけど、法然上人についても、同じようなことが言えるのではないかなと思うんですね。ご著書を拝見したときにそう思ったんです。つまり13歳のときから43歳まで、とにかく先の見えない道を、真っ暗がりを通して、通って、通って、やっとのことで、43歳でブレイクスルーしたっていうふうに、ブレイクスルーという言葉をお使いになったんで、これかなって思ったんですけども。われわれ伝記を読む側からすると、いきなり浄土宗の偉大な思想家になってしまわれるんです。そのあと、まあまあ順調に布教もされて、そしてそれこそ貴族社会にも入って行って、九条兼実のようなトップクラスの人とも交流ができてという、そういうところへ行ってしまうので、内面のドラマっていうのが、とにかく抜け落ちて、30年間は。もし、それを再現できたらいいんですけども、もう法然上人はもうただ、もうしんどかったとおっしゃっただけで（笑）、

**会場** （笑）

**本庄** でなんですね。で、そのブレイクスルーしたあとの思想なんですけども、それがやっぱり、まだまだ掘り尽くせてないんで、それを研究面で掘り尽くせたら、逆にこの30年間の苦しみというのが見えてくるのかなと思ったりもします。それで、文学ということなんですけども、ちょっと4時過ぎてますし、また小説の話ではないのでずれるかもしれませんが

が、私の先輩で浄土宗のお寺のお坊さんに聞いた話なんですけど、哲学やってる人が友達にいますって。そのお友達が先輩に「法然さんのことを知りたいんやけども、どんな本を読んだらいい？」って聞かれたので、先輩が「手紙読め」っておっしゃったんですって。手紙。そしたらもう、その手紙がもうすごくよかったので、「法然さんってこんな人か」というて、彼は言うてたわって。私の先輩言うてました。ちょっと口では言えないその味わいといいますか、味わいという言葉ではもうちょっと表現しきれないような、もうとにかくこうありがたいっていうか、結構な文章なんです（笑）。特に、承如法という方、式子内親王ではないかといわれてる方への、亡くなる直前の手紙なんですけども、ご本人が急に会いたいと言われたんですけども、法然さんが、「いやちょっと、今それどころじゃない、南無阿弥陀仏、唱え続けてるときなので手紙書きます」というて手紙を書いてられるんですけど、その手紙というのが、もう即興で書かれたのに違いないです。もう相手が亡くなるかどうかというときなので。その手紙がもうそれこそ大論文に匹敵するようなものなので、もしお読みでないようでしたら読んでいただいたらいいかと。

しかし、先生に対してものすごい僭越ですね、私ね（笑）。すみません、全然この文脈と合っていないかもわからないです。

**曾和** そういうことを思うにつけても、やはり現代の感覚に合った言葉に落とし込んでいくという基礎的な作業が必要ということになりますでしょう。とりあえず、そこで話が一度切れて、締めくくりができたように思います。4時も過ぎてしまいました。最初に予想したとおり、この4頭の猛獣を御しきれませんでした。総括的なことになりますけれども、やはり求められなくても、中心を固め、それによって裾野を広げていくことが必要ということからも、この研究センターに課せられている使命といいますか、期待されているものは非常に大きいものがあるかと思います。やはり基礎的にこつこつと研究を積み重ねていって、内外に発信するというのが、求められているのではないかと、そのように一番近くでお話を聞かしていただいて思った次第でございます。最初にセンター長、あるいは本庄研究員が申しました、設立の経緯、研究の方向性等もそのようなことになっているのではないかと、改めて内田先生と釈先生、お二人の先生のご高説を伺って、再確認させていただいたとそうに思っております。会場の皆様方におかれましても、これから研究成果が出てくるところでございますので、どういうふうな研究をしているかということを、常に、監視ではないですけども、見ていただいて、またさまざまにご意見お寄せいただけたら、より豊かなものができるのではないかと思います。つたない進行で、時間も守れませんでした。大変申し訳なく思います。このあたりでトークセッションを終わらせていただきます。ありがとうございました。

**会場** （拍手）

**伊藤** ありがとうございました。それでは、内田先生、釈先生、そしてセンター長、本庄先生、

曾和先生にご退席をいただきます。どうぞ皆様、今一度大きな拍手でお送りいただきますようにお願いをいたします。

**会場** (拍手)

**伊藤** 本日は長時間にわたり、お話とトークセッションをお聞きいただきまして、どうもありがとうございました。法然仏教学研究センターは本日の議論を踏まえて、法然上人の精神を対した(?) 佛教大学の機関研究所としての役割を果たしつつ、基礎研究をベースに、発展研究、応用研究を視野に入れ、法然仏教を世界に発信してまいります。どうぞ温かいご支援とご期待をいただきますように、お願いを申し上げて、閉会とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。